

## 西洋社会科学古典資料講習会に参加して

木村明彦

平成12年11月14日(火)から17日(金)の4日間にわたり、一橋大学社会科学古典資料センター主催による「西洋社会科学古典資料講習会」に参加する機会を得た。この講習会は、近年、大学図書館等において、西洋社会科学古典資料の収集・蓄積が進行するのに伴い、これに関する高度な知識が要求されるようになってきたことに応えることを目的として毎年開催されているものであり、今回で第20回を迎えた。受講対象者としては、国公私立大学図書館及びその他の研究機関に所属する者で、西洋社会科学古典資料の整理または調査研究に従事している者とされている。

本学図書館では、従来から整理業務についてはアウトソーシングを実施しており、西洋古典資料の目録作成についても全面的に外部に行っている。また、「関西大学図書館がめざす方向 - ビジョン7項目 - 」を策定し、その具体的施策として私の所属する学術資料課では、さらに徹底したアウトソーシング導入を検討しているところであり、選書を除くすべての業務のアウトソーシングを予定している。このような事情から、私自身も目録作成をはじめ整理業務の経験はまったくなく、知識も欠如しているのが現状である。今回、西洋書誌学等について学ぶことに加え、書物に関する知識をできる限り習得し、今後コア業務としてますます重要となる選書業務に役立てたいとの思いからこの講習会への参加を申し出た。

以下に、この研修について報告したい。

### 講習会の概要

この講習会の内容は大きく、古典研究、書誌学、保存・修復、の3つに大別され、それぞれがいくつかの講義から構成されていた。全体として西洋古典経済学とのかかわりが大きく、今ふりかえると、その知識がもう少しあれば、さらにこの講習会を楽しむことができたことと思う。

このほかに古典資料センターの見学会も実施され、展示資料・貴重書庫・保存作業工房などを見学することができた。展示資料の中には、講義でも紹介さ

れた、ホップズの『リヴァイアサン』やディドロ＝グランベールの『百科全書』の真正版と偽版もあり興味深く見学することができた。保存作業工房では修復・製本などの実演も行われた。また、本学図書館でも、順次、購入・整備をすすめているカール・メンガー文庫(マイクロフィルム版)のオリジナル資料が保管されている貴重書庫の見学は印象的であった。

### 古典研究

ここでの講義は、総論及び各論から構成されていた。各論については、専門性が高く、経済学に関する基礎的な知識の欠如が大きい私にとっては、非常に難しい内容であった。図書館員の私としては、ここでは総論で紹介された、「スミスからマルサス、リカードウへの展開」の理解に集中し、各論についてはある程度見切らざるを得なかったというのが正直なところである。しかし、本学図書館においてもコレクションとして西洋経済思想原典の充実を図っており、総論の講義の中で紹介された古典派経済学における主な人物、その理論の展開及び代表的著書を体系的に学ぶことができたことは、今後の業務に大いに役立つことと思う。また今回はイギリス古典経済学に関する講義であったが、これを機に他の国の古典経済学についても学んでいきたい。

### 書誌学

書誌学については5つの講義が行われたが、ここでは大東文化大学助教授の武者小路信和氏による「記述書誌を読む - 図書館員のための書誌学入門 - 」について紹介したい。

書誌学の魅力の1つとして、武者小路氏は、紙、活字、印刷面、造本など、「モノ」としての書物に残された具体的な物理的証拠に基づいて、その書物の本文、印刷・造本工程や出版にまつわる疑問を解明する「謎解き」の面白さにあるということをおげられた。その「謎解き」について図書館員としては、購入を検討する場合や目録を取る場合などにおいて、

書誌学の研究成果をうまく利用する必要があるとされ、この作業を行わなかったために生じた失敗の事例として、初版として購入したつもりのディドロ＝ダランペールの『百科全書』がジュネーブ版であった例が紹介された。

その後、「書物の仕立て」と「記述書誌の読み方」について講義がすすめられ、折り丁や記述書誌の読み方について例をあげながら説明された。特に折り丁については大変工夫された教材を準備されており、これまで中途半端にしか理解していなかったこともよく理解できた。しかしながら、この講義から得た最大の収穫は、書物及び書誌学のおもしろさにふれることができたことであろう。たとえば、折り丁の仕組みを知り、その構成を調べれば、紙葉のすかし模様のつながり方などにより差し替えがわかるといったことや、造本工程において生じる誤記・読み誤り・差し替え・文章の手直しなどさまざまな原因による本文の異同などである。

### 保存・修復

一橋大学では、カール・メンガー文庫をはじめ多くの社会科学古典資料を蓄積しており、これらの資料の保存修復処置の多くは、センター内の工房にて行われている。こうした実績と経験を踏まえ、平成12年度からは保存修復に関する実習を中心とした「西洋古典資料保存講習会」も実施されている。今回の講習会では、「紙資料の保存と修復」「保存情報としての製本構造」というテーマで講義のみが行われた。以下にその概要を述べたい。

紙資料の劣化の要因を大別すると、物理的劣化（利用等によるもの）、生物的劣化（虫害等）、科学的劣化（酸性紙等）に分けられる。これらについて、修理が必要となる前に何らかの処置を施す、利用を考えた場合に必要となる修復を施す、という2つの観点から講義が行われた。

今日の保存の考え方としては、できる限り現物への処置は行わないというのが主流とのことである。しかし、何らかの処置を施さないとさらに傷みが進行する場合があります、そういった場合に処置が行われる。その際、原型の尊重、資料の現状と処置の記録化、資料に対して非破壊的であること、適用する処置が可逆的であること、の4つの基本原則に留意して処置が行われる。

つづく講義では、本をものとして考えその構造を考えた場合に、資料保存の立場から何が重要かとい

う観点からすすめられた。また、製本構造の基礎知識として折り丁や様々なとじについての説明も行われた。

本学図書館では、虫害対策としては定期的に貴重書庫の燻蒸を行うことにより対処している。しかし、これらの講義を受け、西洋古典資料の利用及び修復に関しては対策が不十分で、今後検討が必要であるように思った。利用に際しては、資料にストレスがかからないよう書見台を準備すべきであろう。また、修復が必要な資料や過去に不適切な修復が施された資料についても、そのまま利用・保存していることにより、さらに状態が悪化しているものもあると思われる。具体的な修復計画を立て検討していくことが必要であろう。

### 終わりに

本学図書館では数年前に、貴重書解題目録の編纂を計画したことがあった。編纂の目的の一つとして、貴重書の整理や取扱に関する十分な経験・知識・能力を持った館員の人材不足に対する懸念を解消することがあった。諸般の事情によりこの計画は断念せざるを得なくなったが、人材不足に対する懸念はなくなったわけではない。アウトソーシングの拡大や大学における人事サイクルの変化に伴い、こうした専門性の高い人材の育成は多くの大学図書館にとっての困難な課題となってきているといえよう。こうした状況を打開するためには、今回の講習会のような研修への参加とそれに続く自己研修が不可欠であると考える。

冒頭に述べたとおり、古典資料を含む選書業務に役立たいとの思いからこの講習会への参加を思い立った。大学を取り巻く環境がますます厳しくなる中で図書費予算の削減を余儀なくされている大学も多いが、幸いにも本学図書館では、古典資料を購入するための予算を何とか確保できている。この講習会を通じて、古典資料の選択の際に調べるべき点、見るべき点についてある程度は学ぶことができたと思う。しかし、同時にまた書物にまつわる奥の深い側面についてもあらためて痛感した。この講習会で学んだことを契機に、今後とも研修を続けていきたい。

（学術資料課 きむら あきひこ）